

「私の人権・母の人権」

小嶋 真央

「嫌だ。やらない。私にだって人権はある」

「じゃあお母さんだって家事やらない。あなたがそういうならお母さんだってやる必要ない。お母さんにだって人権はある」

母と言い合いをしてしまった時のことだ。私は、正直言ってなまけ者だ。いつも家に帰ってきたら、寝るまでゴロゴロしてテレビを見ている。そのたびに親から、

「はし出した？宿題は？ピアノの練習は？」

と指摘される。

確かに当たり前の事だが、やる気のない私はそう言われることも、言われてやることもわずらわしい。何とかやらないで済むようにとつい反抗したり、聞きながそうとする。親の言う事を聞いたかのように、ほんのちょっとだけ、言われた事をやって、大目に見てもらうのがいつもの私だった。

しかし、この時は少し様子が違った。母は勤めに出ているが、家事もきちんとなしてくる。疲れた体にムチうってという感じだ。この日は特に疲れた様子で、「お母さん疲れた。自分のことは言われなくてもやってね」と言われていた。また、私には本好きな兄がいる。本が好きなのはいいが、いつも読み散らかし何冊もあちこちに出しっぱなしでいく。それに学校でもらったプリントなども、整理せず散らかす。私と二人でいると、「散らかし名人戦をしているようだ」と、父に皮肉られたほどだ。悪いことに、兄も部活動で疲れていたせいか、片付けるように言われて

も、いつもに増して動きが鈍かった。そうして夕食後、母は、兄と私の二人に食後の茶碗下げを命じた。私は兄の様子を見て、自分だけちゃんとやるのは損だと思い、

「何で私だけ先にしなくちゃいけないの？兄ちゃんが先にすれば。不公平だ。」と不平を言った。しびれを切らした母が、

「どっちが先でもかまわないでしょ」と言ったことに逆らって、冒頭のような言い合いになってしまった。これは、私が悪い。でも謝るのは、しゃくなことなので、その後何も言わなかった。母は、あきれた顔で片づけをしてくれたが、「明日の食事は自分で準備してね。茶碗も洗わないから。お母さん知らない。」と、爆弾発言をした。これはまずい。兄を見ると同じ事を感じているようだった。父はその日遅く帰ってきたが、どうやら母から話を聞いたようだった。

翌朝、昨日のことなどすっかり忘れていた私だったが、ご飯の支度がしていなかったのだ。兄や私は口々に不平を言ったが、母は怒ったまま早めに出勤してしまった。父は、青くなっていたが、冷蔵庫の中を探して、母の作り置きのごはんを出してくれた。その時、父はこんな言葉をつぶやいていた。

「自分の権利だけ主張してもだめじゃないのかなあ。お母さんの事を少しは考えて行動しないといけないと思う。家事は大変だぞ。お前たち自分のことだけじゃなくて家族のことまでできるかい？怒っていてもお母さん、ごはん準備してくれたんだね。」

自分のわがままに、改めて気付かされた。人権を主張するなら、他人の人権だって尊重しないといけない。私はその逆をやっていたのだ。

その日、さすがにこたえた私と兄は、片付けなど自分でするように気を付けた。でも、結構つらい。自分以外の家族のためにこれ以上のつらさを母だけにさせていたかと思うと、悪い気がした。

夕方、帰ってきた母を少しどきどきしながら迎えた。母は何事もなかったように夕食の準備をはじめてくれたので、ほっとした。私は、同時に、一言謝りたい気持ちと、母の、ありがたみを改めて感じた。

私は食べながら強く思ったことがある。人権を守ることは、何も大げさな事ではなくて、身近な人の権利を尊重する気持ちが大それたことだ。自分ができることや自分のすべきことを他人まかせにしないことを続けることが大切だと痛感した。

ただ実際やるとなると「散らかし名人」の私にとっては、かなり難しい。ケースによっては違いうだろうが、今の時代あたりまえのはずの人権尊重が、今でも言われ続けているのは、理屈では分かっていてもいざ実行するととなると、面倒でしたくないということも、理由の一つのようだと思った。だから身近なところから一步を踏み出すことが、必要なのだと強く感じた。私は夕食のちゃわん下げから始めることにした。下げながら、続けることは苦手なことだけれど、やらないといけないと私は感じている。